

平成17年度富山市青年元気塾
まちづくり提案書

新富山市民42万人観光大使計画

～まちづくりは人づくり～

「富山市民が富山ブランド」

新富山市民参加型まちづくりへの未来像について

1.まちづくりの目的

昨年の市町村合併による「新富山市」も42万都市になり、これからの新しいまちづくりや未来の「富山市像」を明確に打ち出す事が合併の一体感を生み出し、様々な合意形成の基礎となっていくと考えています。海拔0メートルから3,000メートルの山々までをエリアとする富山市は日本はもとより、世界にも類のない都市となりました。この地の利をまちづくりにどのように繋げていくのか、どのように利用していくのか大切な目的になっています。

- 日本の富山でもなく、世界の富山へ
TOYAMA=日本へ

2.まちづくりの現状と課題

日本有数の自家用車保有率の高い富山県は言わずと知れた車社会先進県であると言えます。車での行動の利便性を追求するあまり、駐車場問題などで商業施設や公共施設までもが、大きな敷地を有する郊外へその拠点を移すことにより、中心商店街が不便な場所へとなってしまいました。

その結果、平成18年3月末日で西武富山店が撤退するなど、中心商店街を取り巻く商業ゾーンとしての魅力は影を潜める形になりつつあります。一方で、大和富山店の移転新装オープンや中心部の小学校の統廃合による学校敷地の跡地利用も含め、まちなか居住空間の創出や、まちで暮らす人口を増やす取り組みなど、新たなまちづくりに向けた明るい話題も多くなっています。一方で、少子化・高齢化が加速度的に進み核家族世帯の郊外への流出など人口の居住構造も変化していています。人口に対して商圈・生活圏が広域化しているのも車の保有率の高さに関係していると考えられます。特に、超高齢化社会にあってかつての歴史ある町にあっては過疎化が進み、若手世帯の流出など事態は深刻度を増しています。そんな中において、ライトレール事業など公共交通網の整備は、高齢化社会の足や若者のも公共交通機関離れに歯止めとなる事業になりうるものと考えられます。それには、利用促進の為の啓蒙活動も含め、その利便性に触れる機会を構築するシステムも必要になり、真に付近住民や周辺市民の足として受け入れられる受益形成が必要だと思えます。まず、どのように啓蒙から利用へそして促進へと官民一体となった知恵を出す機会だと思えます。

3.まちづくりの展開案(ライトレール促進編)

A.公共交通機関の利用促進

富山市の歴史を学び改めて富山の素晴らしさを再発見
～生涯学習のスタート～ 小学生観光大使育成計画

「まちなか遠足事業」

4月29日のライトレールの開通により、南北に15キロに及ぶ公共交通機関が整備されます。このライトレールを利用したまちなか遠足を富山県下教育機関に誘致。ライトレールと市電、コミュニティバスなど公共交通機関を利用させ、少人数での遠足スタイルを促進します。ライトレールを利用し岩瀬の北前船の歴史を探究したり、中島閘門を見学することによって、港から中心市街地を結ぶ運河の歴史を再発見。また、市電を利用し、池田屋安兵衛商店、広貫堂などの薬都富山を体験。売薬の歴史、薬の富山が全国に知られる歴史を学ぶ。さらに、コミュニティバスを使って、民族民芸村などの施設散策。土人形体験など、富山の文化に触れる。今までのようにバスでその場に行って観光するというスタイルから、学校からある拠点にバスで行ってそこから公共交通機関を利用した遠足スタイルというものが、富山市なら可能ではないかと思えます。

北前船、中島閘門、富岩運河、薬都、民族民芸村という富山市(旧富山市)の工業の歴史観光資源や民族文化資源はいずれも点と点でしたが、ライトレールができ、市電との繋がりやコミュニティバスなどの公共交通機関の整備によって、線で結ぶことが可能になります。このように、小学生に公共交通機関を利用させる仕組みを作り、富山市の歴史を学ぶ事が大切です。自分達の住む街がどのような歴史を持ち、どのように発展していったのか。北前船が運んできたものは富山市発展の礎になっているということ。そこから生まれた財が教育にも還元され、今の教育基盤を作っていること。売薬さんが大切にした先用後利という考え方が日本の経済や経営に及ぼした影響など、歴史の教育に公共機関と体系を付けさせることによって、富山を愛し誇りを持つことができるのではないかと思います。

北陸新幹線の開業により、富山市も観光都市として生まれ変わります。県外の観光客が富山駅に降り立ったとき、ふと出会った小学生が観光ガイド的に観光地への行き方や歴史を案内したとすれば、これほど素晴らしいことはありません。その為にも、ライトレールの活用や促進することが「観光化」の第一歩となります。

3.まちづくりの展開案(観光促進編)

B.滞在型観光都市、永住型都市の誕生

北陸新幹線が2014年春に開業予定にともなって、観光立県都市として全国から注目が集まります。特に富山市は海拔0メートルから3000メートルまでをエリアしており、しかも富山駅から海までライトレールを利用して約20分、富山地方鉄道を利用して立山駅まで約1時間と自然資源に触れる環境は全国に類のない素晴らしい土地柄でもあります。そんな中、富山市は滞在型、永住・定住型の観光振興による首都圏からの観光や永住、定住の促進を行うことにより、いままで通過されていた県から滞在・永住・定住型への都市へ変化しくと思っています。

C.滞在型観光都市

「癒し」という定義が女性を中心に(美的投資)という感覚から今後はハイクラス=団塊の世代(休息投資)という時間の流れに変化していくと考えられます。通信網のインフラ整備が加速度的に進む現在、癒しの中の休息という部分が最も失われています。ただ単に自然や温泉というキーワードの中で過ごすという休息の形は、昔から湯治など療養目的での習慣がありますが、休息というキーワードでの観光は今までになかったと思います。

富山市は滞在型としてのキーワード=休息という点において、優れた可能性を持っています。例えば、中山間地域の活用による農業体験、漁村地域の漁業体験など、様々な自然体験やガラス、土人形、八尾和紙などの学習体験など、休息に体験というキーワードを組み合わせた観光体験都市としての可能性を秘めています。

また、療養目的で湯治という習慣があったように、富山の和漢薬による療養ということも新たなPRになると思います。薬都としての観光化にプラスして優れた和漢薬治療のスペシャリストが人材として多く抱えていますので、湯治的な要素を和漢薬という置き換えがあってもいいと考えます。

さらに、女性の癒しという部分において、富山の薬膳料理や郷土料理を美味しく食べながら健康になるというキーワードも必要だと思います。

D.永住・定住型促進

近年、首都圏を離れ「田舎暮らし」という生活スタイルが定着しています。その多くがその土地に無縁で、ある時、偶然に訪れた町が気に入ったからという理由が殆どです。富山市には、「田舎暮らし」を実現できる中山間地域や漁村地域が豊富にあります。そして、物価も低い上、教育環境も充実し、雇用環境の良さという面においても優れた都市環境でもあります。さらに、農業面においても、米作りを含む穀物や園芸生産に適した環境はいうまでもなく、その技術指導や中央農業高校の存在など技術支援やバックアップ体制も整っています。また、漁村地域も後継者不足による高齢化対策やブランドとなっている漁業資源もあり、サポート体制も整っていると思います。

4.まとめ

富山市は新幹線の開業により、通過県であったり、流出県であったりする
という懸念があることは否めませんが、流入人口を増やすには、観光化
は必須条件であり、国際化への観光誘致も含め、総合的な施策で独自の
観光都市になっていけばすばらしいと思います。

その為には、富山市の歴史や文化を学び、富山市民一人ひとりが富山市を誇り
に思うことが大切です。ライトレールの開業は失われつつある歴史や文化を改
めて学びあう機会になったと思います。公共交通機関を利用した小学生の遠足
事業は単に歴史を学ぶ事だけではなく、その小学生が遠足後に親もその地に
連れて行くという副産物が生まれた時、親も子供から歴史を学ぶ親子の交流の
機会にもなります。そのような流れと体系ができると、確信します。

北陸新幹線の開業は観光化都市への転換期となります。真の富山ブランドはまさ
に県民・市民であり、その意識を持つ器づくりこそがまちづくりの一步であると確
信しています。